



PRESS RELEASE

2013年9月18日
 「明日の象徴」組織委員会

報道関係各位

健やかな日本の明日を築く、若い世代のイノベーション追求を称える
 第2回「明日の象徴」受賞者6部門7名が決定

公益社団法人全日本病院協会(会長:西澤寛俊)、一般社団法人日本病院会(会長:堺 常雄)、サノフィ株式会社(代表取締役社長:ジェズ・モールドイング)は、若者の活動に光を当てることで若い世代全体にイノベーションを追求する機運が広がることを目的として、医療、保健、ライフサイエンスの分野で活躍する 35 歳以下の期待の精鋭を顕彰する「明日の象徴」を昨年創設しました。この度、第 2 回受賞者が下記の通り決定しましたのでお知らせします。授賞式は 10 月 2 日(水)18 時より帝国ホテル東京にて執り行われます。

「明日の象徴」第2回受賞者 ※敬称略

研究者部門	たきのうえ まさひろ 瀧ノ上 正浩 東京工業大学大学院総合理工学研究科 講師
医師部門(国際)	ありい まよ 有井 麻矢 ハーバード大学医学部ブリガム・アンド・ウィメンズ病院 講師 ハーバード大学人道支援イニシアチブ 国際救急フェロー
医師部門(国内)	かんの たけし 菅野 武 丸森町国民健康保険丸森病院 内科医長 東北大学大学院医学系研究科 消化器病態学分野 博士課程
社会政策部門	むらかみ ゆき 村上 友紀 OECD(経済協力開発機構)ヘルスエコノミスト・政策アナリスト
看護・保健部門	あがわ まさ 阿川 牧 東京大学大学院 医学系研究科 国際保健学専攻 国際地域保健学教室 博士課程
NGO・ボランティア部門	すはら あつし 須原 敦 特定非営利活動法人 ADRA Japan プロジェクト・マネージャー
ヘルスケア基盤部門	せきやま かずひで 関山 和秀 スパイバー株式会社 代表取締役社長

選考は主催者から独立した審査委員会(安西祐一郎、石井正三、井村裕夫、広中和歌子、藤井宏昭、古川貞二郎、細川佳代子、向井千秋、山下泰裕 (五十音順、敬称略))によって厳正に行われました。

以上

別紙 1:「明日の象徴」概要

別紙 2:「明日の象徴」第 2 回受賞者プロフィール

<本件に関するお問い合わせ先>
 「明日の象徴」組織委員会 文室(ふむろ)
 Tel (03) 5427-7305 Fax (03) 5427-7310
info@ashitanoshoch.com

<別紙 1:「明日の象徴」概要>

「明日の象徴」は医療、保健、ライフサイエンスの分野で活躍している 35 歳以下の期待の精鋭の活動を顕彰します。若い人々の活動に光を当てることで、若い世代全体にイノベーション追求の機運が広がること、またそれを奨励、促進する環境を醸成することを目的に、平成 24 年に創設されました。イノベーションを通じて国民の健康を促進し、健やかな日本の明日を築きます。また、やる気ある優秀な人材を育て、世界的な競争力を高め、産業の育成を目指します。

「明日の象徴」は、平成 23 年 3 月 11 日に起きた東日本大震災の後、各地域における復興へ向けた取り組みの中で、多大なる貢献をされてきた方々を顕彰した「希望の象徴」(平成 23 年 5 月)、「復興の象徴」(平成 24 年 3 月)を継承するものです。

【共催】 公益社団法人全日本病院協会、一般社団法人日本病院会、サノフィ株式会社

【後援】 公益社団法人日本医師会、公益社団法人日本看護協会、福祉自治体ユニット(授賞式後援)総務省、外務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省

【顕彰部門】 研究者部門

医学、ライフサイエンス分野における基礎、臨床研究、公衆衛生に従事する研究者

医師部門

専門医、プライマリーケア医師などを含む

社会政策部門

医療経済、医療政策を含む社会政策分野における研究者

看護・保健部門

看護職、助産師、セラピストを含む

NGO・ボランティア部門

医療、ヘルスケアの分野で新たな領域を開拓している団体(NPOを含む)、個人

ヘルスケア基盤部門

上記部門対象者以外で医療、ヘルスケアに関連するあらゆる業種、例えば薬剤師、医療 IT、医療機器開発、病院経営などに従事する者

審査委員会 (五十音順、敬称略)

安西 祐一郎	独立行政法人日本学術振興会理事長
石井 正三	公益社団法人日本医師会常任理事
井村 裕夫	公益財団法人先端医療振興財団理事長、元京都大学総長
広中 和歌子	元参議院議員
藤井 宏昭	独立行政法人国際交流基金顧問、元駐英大使
古川 貞二郎	恩賜財団母子愛育会理事長、元内閣官房副長官、元厚生事務次官
細川 佳代子	公益財団法人スペシャルオリンピックス日本名誉会長 NPO 法人勇気の翼インクルージョン 2015 理事長
向井 千秋	独立行政法人宇宙航空研究開発機構 宇宙飛行士運用技術部、 宇宙医学研究センター長、宇宙飛行士
山下 泰裕	東海大学教授・理事・副学長

アドバイザーボード(諮問委員会) (五十音順、敬称略)

岩本 愛吉	東京大学医科学研究所教授
落合 慈之	NTT 東日本関東病院院長
加藤 良三	日本プロフェッショナル野球組織コミッショナー、元駐米大使
河北 博文	社団医療法人河北医療財団理事長、公益財団法人日本医療機能評価機構代表理事・ 副理事長兼専務理事、一般社団法人東京都病院協会会長
川口 順子	前参議院議員
北村 俊昭	国際石油開発帝石株式会社代表取締役社長、元経済産業省審議官

桐野 高明	独立行政法人国立病院機構理事長
栗山 尚一	元駐米大使、アジア調査会会長
幸田 正孝	一般財団法人医療経済研究機構顧問、元厚生事務次官
佐野 忠克	ジョーンズ・デイ法律事務所弁護士、元経済産業省審議官
清水 潔	文部科学省顧問、元文部科学事務次官
高成田 享	仙台大学教授、元朝日新聞社論説委員
立川 敬二	元株式会社 NTTドコモ代表取締役社長
直嶋 正行	参議院議員
中川 正春	衆議院議員
中林 美恵子	前衆議院議員
羽田 孜	前衆議院議員、元首相、元外務・大蔵・農林水産各大臣
久常 節子	国際医療福祉大学大学院副大学院長、前社団法人日本看護協会会長
藤田 幸久	参議院議員
古屋 範子	衆議院議員
町村 信孝	衆議院議員
水田 邦雄	全国土木建築国民健康保険組合理事長、元厚生労働事務次官、 国際長寿センター(日本)代表
百村 伸一	自治医科大学附属さいたま医療センター・センター長
渡辺 孝男	前参議院議員

※各人は所属先の代表として「明日の象徴」の審査委員・諮問委員を務めている訳ではありません。

<別紙 2:「明日の象徴」第 2 回受賞者プロフィール>

研究者部門: たきのうえ まさひろ 瀧ノ上 正浩 東京工業大学大学院総合理工学研究科 講師
推薦者: 清水 潔 文部科学省 顧問



瀧ノ上氏は、物質やエネルギーの流入出のある「非平衡開放系」を細胞サイズで実現することに成功し、非生命の物質から生命のような自律的な挙動を行う人工細胞を構築する基礎技術の開発に成功した。非平衡開放系は、生命が自律的な活動を維持する際に必須であることが知られており、生命と非生命の違いである「自律性」を実現するための基礎となる物理学の概念である。瀧ノ上氏は、マイクロ流体技術を利用するという全く新しい発想でこのような技術の開発に成功し、これにより、「生命とは何か」を物理科学的な観点で解明するための新規技術の開発、例えば、細胞内のダイナミックな反応をモデル化して実験・解析する細胞サイズの反応システムや、時間発展のある人工細胞などの開発が可能になると考えられている。このような新規技術により、細胞内の生化学反応を調べる生命科学の基礎研究のみならず、モデル細胞系を利用した医薬品開発などにおいて発展が期待できる。また、一方で、瀧ノ上氏は、ナノメートル・マイクロメートルのスケールにおいて、生体分子システムの自律的な運動の実現や、生体分子による自律的なコンピュータの実現にも成功しており、これらは、将来、病気の診断や治療を体内で自律的に行うメンテナンスフリーな微小生体分子ロボットの開発などにつながる可能性を秘めており、科学的意義に加え、医療、医薬産業分野の創出につながる革新的な研究である。

東京大学理学部物理学科卒

東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了 博士(理学)

医師部門(国際): ありい まや 有井 麻矢 ハーバード大学医学部ブリガム・アンド・ウィメンズ病院 講師
ハーバード大学人道支援イニシアチブ 国際救急フェロー
推薦者: 川口 順子 前参議院議員
武田 純三 慶應義塾大学病院 病院長
末松 誠 慶應義塾大学 医学部長
横倉 義武 日本医師会 会長



国際救急の専門家を目指して渡米し、米国で救急医療に従事するとともに国際保健と人道支援の分野でプログラム開発、教育と研究に携わってきた。東日本大震災発生に伴い、ハーバード大学人道支援組織から派遣されて直ちに来日した。日本医師会や日本製薬工業協会によって集められた医薬品を米国政府の協力を仰ぎ、警察、自衛隊、米軍、米大使館、民間運送会社などと連携しながら被災地に届けるオペレーションを、発案から 48 時間以内で実現させた。これが米国政府による「トモダチ作戦」につながった。その後現地入りして警察の遺体検案に尽力、「究極の人道支援」の範を示した。

イエール大学病院では救急科レジデント医師として働きながら、国連開発計画ミレニアム・ビレッジ・プロジェクトのコンサルタントとして、ウガンダで救急医療システムの調査を行い、その結果に基づき改善計画を提案し、実践。

また、国際救急フェローとなった 2012 年 4 月にはシリア難民支援のため、国際 NGO の緊急医療専門家としてヨルダンに向い、難民のニーズ調査、サービス・マッピングと保健医療センター設置の準備を行った。

こうしたフィールド・ワークを通して、人道支援における多機関のコーディネーション、情報共有、そして支援評価の重要性を改めて痛感し、それを補助するモバイル・テクノロジーに注目。2013 年 4 月にハーバードで行われた大規模災害シミュレーションでスマートフォンを用いたツールを導入し、現在そのツールを開発したチームとともに、有用性研究を行っている。

慶應義塾大学医学部卒

ハーバード大学公衆衛生大学院卒業(公衆衛生学修士)

医師部門(国内): ^{かんの たけし}菅野 武 丸森町国民健康保険丸森病院 内科医長
 東北大学大学院医学系研究科 消化器病態学分野 博士課程
 推薦者: 紀伊國 献三 笹川記念保健協力財団 会長
 高久 史磨 日本医学会 会長



2011年3月11日の東日本大震災、勤務していた公立志津川病院には5階建の4階まで津波が押し寄せた。患者・スタッフの3分の2が死亡・行方不明となる中、第一波が引いたところで4階に降りて生存者を救出。孤立した病院で最後の患者が救出されるまでの3日間、陣頭指揮をとって230名の命を救った。その後、再び南三陸町に戻り現地の医療体制の再開に尽力。米タイム誌による2011年「世界で最も影響力のある100人」に選出された。

現在は丸森病院で地域医療における臨床医として働く一方、東北大学大学院医学研究科消化器病態学分野にて大震災への対応を人道的に捉えるだけでなく宮城県被災地での消化性潰瘍の実態を調査し、災害時の心因性ストレス

単独でも消化性潰瘍が発症することなどを **Journal of Gastroenterology**(2013年4月)に論文掲載するなど、研究者としても大震災を次へと伝える成果を残しつつある。

また震災から生き残った者の使命と感じ、業務の合間を縫って、多くの取材対応や著書*を執筆し、全国各地において大震災の語り部として講演なども行っている。医学系学会や医療関係の学生をはじめ、市民講座や地域の勉強会、さらには南海トラフ対策を急務とする高知県庁まで震災後からの2年半で70回以上、のべ約1万2千人に対して「できることを果たす」「助け合う尊さ」「医療者としてのプロフェッショナル意識」そして「失った命を忘れず、明日への希望を思い描く」ことをテーマに伝え続けている。

自治医科大学卒

*「寄り添い支える—公立志津川病院若き内科医の3・11」(河北新報出版センター)

社会政策部門: ^{むらかみ ゆき}村上 友紀 **OECD(経済協力開発機構)**ヘルスエコノミスト・政策アナリスト
 推薦者: 片上 慶一 外務省 経済局長



ハーバード大学公衆衛生大学院を卒業後、世界銀行勤務を経て、現在OECDで医療会計分野において活躍している。OECDでは様々な医療政策の分野において、先進国の医療制度の比較分析調査を行い知見をまとめている。また、そのOECDの経験をもとに途上国に対して技術協力を行い、その経済成長を助けているが、村上氏はその活動の中心的存在で加盟国関係者から高く評価されている。特に日本政府の「国際保健外交戦略」の中核をなす、「ユニバーサルヘルスカバレッジ(皆保険制度)」は、推進するにあたり保健財政の知識がきわめて重要であり、村上氏が責任者を務める保健財政プロジェクトは日本政府

が財政支援を行っている。

青山大学経済学部卒

テキサス州立大学ヒューストン公衆衛生大学院(MPH)

ハーバード大学公衆衛生大学院(MS)

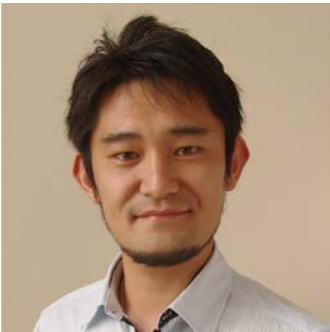
看護・保健部門： ^{あがわ まき} 阿川 牧 東京大学大学院 医学系研究科
国際保健学専攻 国際地域保健学教室博士課程
推薦者： 上川 陽子 衆議院議員



幼いころから途上国の母子のために働きたいという夢を持ち、看護大学に進学して以来一貫して途上国の保健の向上に貢献してきた。卒業後、国内での臨床経験を経て国境なき医師団の看護師としてナイジェリアに赴き、銃創などを負った患者の看護にあたりながら現地スタッフの育成に尽力した。修士課程では、フィリピンの山岳地帯に赴いて妊娠・出産・育児におけるコミュニティーヘルスワーカーの活動について研究を行い、論文として取りまとめた。その後国際協力機構(JICA) ジュニア専門員としてアフリカ、アジアの途上国における看護助産教育、保健人材育成プロジェクトなどに携わった。また、ジュネーブの世界保健機関内に事務局を置く世界保健人材同盟に出向し、保健人材の国際会議の準備運営に携わり、会議を成功に導いた。現在は看護大学などで国際看護の非常勤講師を務め、若手の人材育成に携わりつつ、東京大学大学院国際保健学の博士課程で保健人材について研究し、保健指標の向上のために尽力している。

聖路加看護大学卒
東京大学大学院国際保健学修士課程修了

NGO・ボランティア部門： ^{すほら あつし} 須原 敦 特定非営利活動法人 ADRA Japan プロジェクト・マネージャー
推薦者： 逢沢 一郎 衆議院議員



大学生時代、ADRA Japan ボランティアとして参加したネパールにおける口唇口蓋裂医療チーム派遣事業に感銘を受け、NGO 職員として、恵まれない環境で苦しむ子ども達への支援に従事することを決意。企業で業務経験を積んだ後、2008年からプロジェクト・マネージャーとして復帰、同事業の日本国内およびネパールにおける業務の総括を担当。同事業では毎年、約 30 名の医師、看護師、技師、薬剤師などからなるボランティアチームを結成し、2 週間の滞在で約 50 名の口唇口蓋裂患者を治療、術後ケアまで行っている。事業を開始した 1995 年当時はネパールに口唇口蓋裂の手術ができる医師は一人しかおらず、手術を受けられる患者は極めて限られていた。今日でも、農業で生計を立てる一般的なネパール人にとって年収の数倍に相当する高額な治療費に手が届かず、手術を受けられずにいる患者は多い。ADRA Japan は事業開始から 2012 年までの 17 年間で約 900 人の患者の治療を行い、食事や発語などの日常生活に支障をきたし、その外見から社会的差別の原因ともなる口唇口蓋裂から患者を救ってきた。また、当該事業の参加経験者から国際緊急援助隊や青年海外協力隊へ参加する人材を輩出しており、海外で活躍できる日本人医療従事者の育成にも貢献している。

青山学院大学大学院 国際政治経済学研究科卒

ヘルスケア基盤部門:

せきやま かずひで
関山 和秀

スパイバー株式会社 代表取締役社長

推薦者:

米倉 誠一郎 一橋大学 イノベーション研究センター教授



関山氏は、2001年慶應義塾大学環境情報学部入学、同年9月から慶應義塾大学先端生命科学研究所、富田勝研究室に所属。2004年9月より人工合成クモ糸の研究を開始した。その成果をもとに、2007年にスパイバー株式会社を仲間と共同で創業した。その後、フィブロイン遺伝子の設計技術、フィブロイン遺伝子のハイスループットな合成技術、微生物を用いたフィブロインタパク質の発酵生産技術、および、精製したフィブロインタパク質を繊維化するための紡糸技術の開発を並行して進め、スケールアップが可能な量産基礎プロセスを確立、2013年5月に試作品を公開し、世界初の人工合成クモ糸繊維工業化への道を切り拓いた。本素材は医療分野のみならず、自動車や幅広い産業に

利用できる。これまでベンチャーキャピタルなどから約15億円を調達、経済産業省、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構などからの支援を受けながら研究開発を進める一方で、大手自動車部品メーカーと共同でパイロットプラントの建設を進めており、2013年中に月産100キログラム、2015年内に月産1トン規模の生産体制を実現し、グローバルなサンプル供給を目指す。

これはゲノム遺伝子工学、バイオインフォマティクス、バイオミクリー、紡糸技術など、インターディシプリナリーな研究視点とベンチャースピリットを融合させた稀有な事例である。

慶應義塾大学政策・メディア研究科修士課程 修了

以上